

環境アセスメント学会生態系研究部会第9回定例会

第9回の定例会は、2006年12月1日に「**環境アセスメントにおける土壌インベントリーの新たな位置づけ**」をテーマに、(独)農業環境技術研究所農業環境インベントリーセンターの大倉利明氏を演者として迎えた。演者はこれに関連した問題提起を最近している(Ohkura & Hamada, 2006; 大倉・浦郷・浜田, 2006)

生態系の構成要素としての土壌の理解の仕方を土壌断面の図と「土」という漢字を対比しながらの説明にはじまり、World Resource Base(WRB)によるGlobal Soil Regionの図をみながら、世界に分布する土壌のなかでも豊かな草原の土壌であるMollisols(モリソル)は分布域が10%である事を知る。関東地方の火山灰土の黒ボク土は世界的に見ると0.7%の分布域である。これらの例は、土壌の豊かさから見た一つの自然の財産としてのインベントリーである。土壌は生態系の重要な一部でありそれを支える大切な基盤でもある。さらに、豊かさという価値のほかに多様な機能を持つユニークな価値があることが示された。多様な機能の中には微生物から、植物、さらには動物を含む生態系を支える部分、炭素や窒素等の元素循環への寄与、水の保全機能、熱やエネルギーを貯め込む、があげられ、その基本的な価値に目を向けることが土壌をインベントリーとしてとらえる際の重要な視点であることが述べられた。

二酸化炭素排出権とのかかわりで、例えば炭素収蔵能という機能の価値、その他の土壌の持つ価値に着目した土壌保全管理のための、北米、カナダ、EU、英国、さらに日本の2007年度より実施予定の環境直接支払いの実例、が紹介された。これらを実施するにあたっては自然の財産としてのインベントリーの理解が必須である。今後の土壌インベントリーの活用には、以下の点に留意する必要がある。情報へのアクセシビリティ、分類図から解釈図(価値付けをともなう)への展開、DSR(OECDによる)モデルに準拠した影響評価、自治体・流域・国などの異なるスケールにおいて実効性のある評価の枠組み、土地倫理(Land Ethics)(A レオポルド、1997)の醸成とコスト負担への意識改革など。

T. Ohkura and R. Hamada (2006) A Soil Inventory Concept: Bridging Human Society and Ecosystem. Power, poverty and sustainability, The role of Impact Assessment, 26th Annual Conference of International Association for Impact Assessment, Abstract Volume p 99.

(7 pages extended summary in CD will be scheduled to be released)

大倉利明・浦郷昭子・浜田竜之介(2006) 土壌・植物インベントリー情報の環境アセスメントへの応用 74-78、環境アセスメント学会2006年度研究発表会要旨集

A. レオポルド(新島義明訳)(1997) 野生のうたが聞こえる 講談社学術文庫1301(原著はAldo Leopold "A Sand County Almanac" Oxford University Press 1949, 日本語版は最初、森林書房から新島義昭訳「野生のうたが聞こえる」1986年2月出版)
(文責:元東京農工大学、前江戸川大学 浜田 記)